



オピニオン 電子カルテ

このコーナーでは毎回、院長の考え方や想いをお伝えしていきます。

院長 加藤 瑞一



「電子カルテ」が世に出てからどのくらい経つでしょうか。インターネットで調べたところ、意外と最近で、1999年だったようです。当院が電子カルテの自院開発を始めた年と同じです。

電子カルテの普及率(令和2年)は、一般病院全体で57.2%、400床以上91.2%、200~399床74.8%、200床未満48.8%、一般診療所49.9%です。今後もさらに普及率が上がっていくと思います。

1999年当時は医療従事者にもまだキーボード・アレルギーの者も多く、電子カルテ導入は反対されました。この20数年でPCに対するアレルギーは少なくなったと思います。

電子カルテには従来の紙カルテと比べて長所がたくさんあります、反対に最大の短所は、医師が外来診療の時にキーボード操作に忙しく、ディスプレイばかりを見て、患者さんの顔を見ることが少なくなったことでしょう。「もっと私の顔を見て診察して欲しい」と感じている患者さんもいるのではないかでしょうか。

当院は1998年ごろから電子カルテの導入を考えていましたが、いろいろな大手メーカー製品の使い勝手がまだまだ悪かったため、「モイス研究所株式会社」という小さな会社と電

子カルテを共同開発することになりました。最初は処方箋発行と外来診察予約の2つの機能のみで、その後、機能を少しづつ開発・追加していく、2006年2月の新病院開院と同時に、外来診療の紙カルテは廃止し、電子カルテに移行しました。ただ、すべてペーパーレスには出来ず、印刷物で補いながらのスタートでした。次は、入院医療に関するさまざまな機能を開発・追加してきました。約24年間開発してきましたが、電子カルテ部門が「BCI株式会社」に分社化されたこの会社の開発陣のマンパワーは大手メーカーと比べて圧倒的に少なく、開発が思ったようなスピードで進まず、補助的に使用している印刷物も減らず、かえって増えるくらいで、自院開発をこのまま続けていいのか、と疑問を抱くようになりました。

一方、大手メーカーは何百人もいるエンジニアたちが開発を進めますので、この20数年でかなり使いやすい形になっていました。そこで、電子カルテの自院開発はもう諦めようと決心しました。昨年から1年以上の準備期間を経て、今年5月から、「ソフトウェアサービス株式会社」製電子カルテでの診療を開始しました。これを契機に、診療の質や職員の業務効率が上がることを期待しています。